

## 仰韶文化の集落構造

岡村, 秀典

<https://doi.org/10.15017/2230262>

---

出版情報 : 史淵. 128, pp.121-145, 1991-02-28. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 仰韶文化の集落構造

岡村秀典

## はじめに

仰韶文化は、黄河中流域を中心とする粟・黍作農耕文化である。放射性炭素年代測定法によると、紀元前五〇〇〇年ごろから三〇〇〇年ごろに位置づけられる。華北での農耕の始まりは、これよりさらに古く、紀元前六五〇〇年ごろまで遡ることが確かめられているが、仰韶文化に到ると、農業生産の安定を推測させる大きな集落が形成される。

陝西省臨潼県に所在する姜寨遺跡は、一九七二年から七九年にかけて広い面積にわたって仰韶文化の集落が発掘され、一九八八年にその正式の調査報告書が公刊された<sup>1)</sup>。期待に違わず、この報告書は中国新石器文化のいろいろな面にわたって新しい知見をもたらし、とりわけ仰韶文化前期について墓地を含む集落のほぼ全容が明らかされたことは意義深い。本稿ではこの姜寨遺跡の成果を中心に、仰韶文化に属するほかの遺跡の調査成果を加えて、仰韶文化の集

表1 仰韶文化の編年

	姜寨遺跡	陝西	河南
前期	姜寨1期	半坡類型	—
	姜寨2期		
中期	姜寨3期	廟底溝類型	大河村1・2期
後期	姜寨4期	西王村類型	大河村3・4期

ある住居から分析をはじめ、少しずつ枠を広げていく方法を取りたいと思う。

なお、仰韶文化の編年や地域の細分にはあまり立ち入らないが、本稿で用いる地域別編年は表1の通りである。そしてたとえば半坡期とは陝西地区の仰韶文化前期という意味で使用する。

## 一 住居の構造

### 1 住居の形態と内部施設

仰韶文化の住居には、地面に穴を掘って屋根を架けた竪穴式住居(図1)と地上に壁を築いた上に屋根を架けた平地式住居とがある。平面形では円形と方形とに分かれる。時期と地域によって異なった住居形態があらわれているが、

落構造を検討し、さらに仰韶文化における人々の集団構造を明らかにしたいと思う。

これまでの集落研究を顧みれば、日本考古学においては中国に比べてずいぶんと研究の蓄積があり、分析の上でも傾聴に値する方法が多くみられる<sup>2)</sup>。仰韶文化の集落の分析にあたって、こうした日本の方法を積極的に取り入れるべきであろう。しかし中国にも日本と違った優れた研究成果があることも事実である<sup>3)</sup>。母系社会から父系社会へとというシエーマを前提にした集落論が中国の研究にあまりにも多いのは歓迎できることではないが、個々の発掘報告のなかには注目すべき調査成果があらわれているものがあり、それを掘り起こしつつ、日中両国の研究を踏まえた新しい研究視角を呈示することも本稿の目的としたい。

集落とは、人々が集団で生活し、居住する場であり、寝食の場である住居が集合している空間にとどまらず、祭祀・信仰の空間や死者を埋葬した墓地など人間の生活の範囲を広く包括する概念で理解すべきである。これを念頭におきつつ、ここでは議論の筋道として最小の単位で

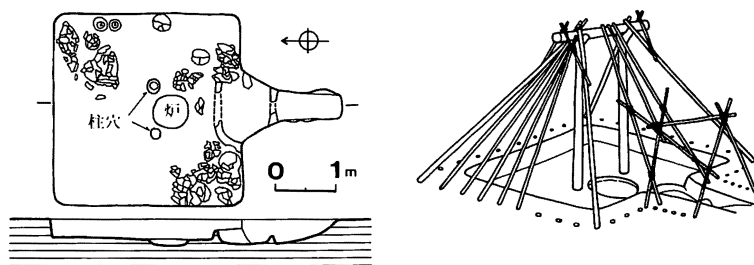


図1 姜寨遺跡46号住居跡とその復原（注1文献 一部改変）

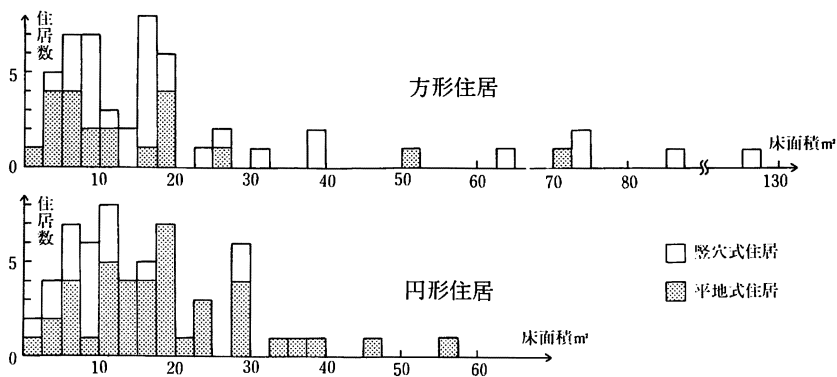


図2 姜寨遺跡の住居の規模

姜寨遺跡の半坡期集落では、竪穴式、平地式、あるいは円形、方形のいずれもが同時に並存している。姜寨遺跡の報告書では方形住居について小型(四〇〜一八平方メートル)、中型(二四〜四〇平方メートル)、大型(五三〜八七平方メートル)に区分し、円形住居は小型に区分されるとしている。しかし報告書に付載の登記表から作製した床面積のヒストグラム(図2)をみると、円形住居にも中型方形住居に匹敵する広さの床面積のものがあり、住居面積で明確に区分できるわけではない。ここでは円形、方形にかかわらず、姜寨遺跡の報告の区分を参考にしながら便宜的に二〇平方メートル以下を小型、二〇〜六〇平方メートルを中型、それ以上を大型としておく。中型・大型住居の規模にはかなりのばらつきがあり、数の上

では二〇平方メートル以下の小型住居が全住居の四分の三を占める割合になる。

ただし竪穴式住居の場合、屋根が竪穴より少し外に広く架けられるため(図1の想定復原を参照)、竪穴の上縁にも日用品などを置くことが可能であり、実際の有効面積は床面積より広がったと推測される。半坡期の竪穴式住居には床面や壁面に草泥土を塗り、それを焼き固めたものが多いが、宝鶏北首嶺二三号住居では竪穴の外周〇・五メートルの地面にも焼かれた草泥土が及び、そこに石磨盤・磨棒などが置かれたまま遺存していた。住居の上面は後世の削平を被ることが多いために、このような良好な遺存状態をみることはほとんどないが、住居内の空間利用を考えるとときには、同時に住居の立体構造にも留意する必要がある。

竪穴式住居には傾斜した細長い出入口が竪穴から外に突出し、平地式住居でも壁体の不連続な部分から出入口を確定することができる。そして半坡期の住居では、普通、住居内の中央、やや出入口寄りのところに炉が設置されている。炉の多くは素掘りで、周囲の土は熱を受けて赤変している。炉は暖房用としての機能のほかに、炊飯施設としての役割をもっていたことは、炉の近くから炊器である鼓腹罐などの土器が出土していることから推測できる。このような炊飯・暖房用の炉が小型住居、大型住居という住居の規模にかかわらず、各住居に一基備わっているのが半坡期の特徴であり、それはまた小型住居を含めて各住居がひとつの消費単位として独立していたことを示している。

また中型・大型の方形住居には、出入口の左右両側もしくは片側の隅部に方形のベッド状土床をもつものがある。数人が睡眠できる大きさがあり、これにベッドとしての機能が想定できるならば、中型・大型住居も生活・居住の場としての性格をもっていたことになる。

## 2 住居内の生活復原

不幸にも火災に遭った住居では、家財道具が本来のまま放置されていることがあり、その出土状況から住居内の生活にある程度復原することができる。姜寨遺跡の報告書では、こうした火災住居を住居内の空間利用、さらに居住

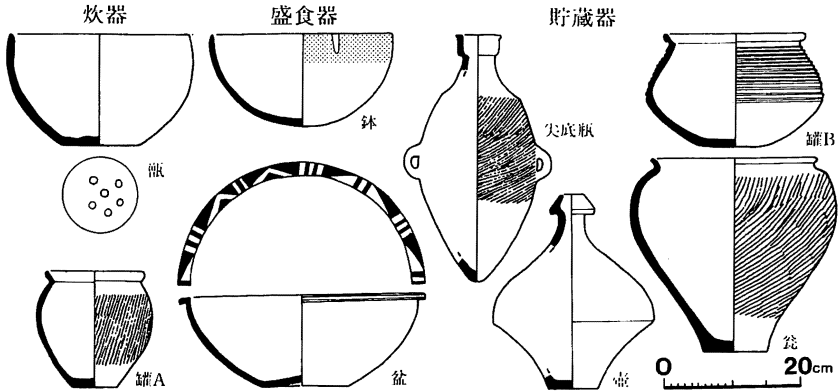


図3 姜寨遺跡半坡期の土器 (注1文献より)

人員の推定に利用しており、たとえば床面積一〇平方メートル足らずの四六号住居(図1)について、住居内の東側と西南部が日用土器類を置く空間、残りの西北部分の三〜四平方メートルが睡眠の空間として利用されたと考え、三、四人程度の居住人員を推算している。そしてほかの同様な事例を勘案して小型住居の居住者は五人を越えない小家族であり、経常的に生活する安定した消費単位であったと考えている。また中型住居については、その床面積から一〇人程度が居住し、大型住居には二、三〇人が生活したと推測している。しかし床面積と居住人員とが比例関係にあったというのは、あまりに機械的な計算であり、そのままでは従い難い。そこで住居内から出土する土器の組成を併せて吟味し、その生活状況を復原することによって居住人員の算出を試みることにしよう。

半坡期の土器は基本的に夾砂鼓腹罐、甑などの炊器、鉢、盆などの盛食器、泥質罐、瓮、尖底瓶、壺などの貯蔵器からなっている(図3)。半坡期の墓では炊器、盛食器、貯蔵器がセットになって出土することが頻繁にみられる。夾砂鼓腹罐は直接火にかけて炊飯するために、胎土に砂を多く混ぜた土器であり、ススが付着したままの実際に火にかけて使用されたものが多い。そのほかの器種は盛りつけや貯蔵に用いるために緻密な粘土を使用した泥質土器であり、とくに食事の盛りつけに用いる鉢や盆には彩色を施して飾ったものがある。

表2 姜寨遺跡における住居の規模と出土品

住居	床面積	罐A	瓶	鉢	盆	罐B	瓮	その他	備考
17	30.7	1		4	1	1	1	彩陶片、石斧、竹鏃・鏃	火災
88	17.1	1		2				彩陶片、陶球	
42	16.8	5		9	1	2		石刀2・斧・磨棒・磨盤・砥石	
30	16.3	2		3		2	2	砥石、竹鏃	
14	13.6	1	1	2				陶盤・彩陶片、竹鏃・箭・魚叉2 石磨棒2・球・斧・鏃2	火災
41	11.2	4		3			4		火災
46	9.8		2	4	1	4	2	陶瓶3	火災
66	9.4	2		3	2	3	1	陶盃、石斧3・鏃1・磨棒4	火災
56	8.1	1		3		2	1	陶瓶1、石斧	
109	7.7	1	1	4	1	1		石斧・磨石	火災
35	7.1	2	2	1	1	1		石斧	

\*罐A：夾砂鼓腹罐（炊器）、罐B：泥質罐（貯蔵器）

姜寨遺跡において比較的まとまった数の土器が出土した住居を抽出し、床面積の広い順に並べたのが表2である。このなかで一〇九号住居が円形竈穴式住居で、残りすべてが方形竈穴式住居であり、一七号住居は中型住居に属し、それ以外はすべて小型住居となっている。報告書の本文に火災住居との記述があるものはそれを備考に記した。

まず、各住居では炊器、盛食器、貯蔵器が一通り揃い、床面積の大小にかかわらず、各住居が炊飯、消費単位として独立していたことがわかる。また、各器種の数量は住居ごとに必ずしも一定しないが、おおむね炊器の夾砂鼓腹罐が一、二点、盛食器の鉢が三、四点、盆がせいぜい一点ある程度、という傾向が看取できる<sup>6)</sup>。このうち盛食器としての盆と鉢の数を比較すると、盆は住居者全員の共用器であり、鉢は個々人に所属する食器であったという推測が可能であり、それを認めるならば、逆に鉢の数をもって居住者の数を導き出すことも不可能ではない。この推論は今後の良好な住居内一括資料の増加を待つて確認する必要がある。さらに注意を喚起したいのは、火災住居であり、床面積が三〇平方メートル余りある中型の一七号住居でも、炊器の夾砂鼓腹罐が一点、盛食器の鉢が四点、盆が一点、貯蔵器が二点と、小型住居とほとんどかわらない土器構成になっていることである。この土器構成が本来のなかでも床面積が七平方メートル程度のものとの倍近い十数平方メートルのものとの間にも量差が認められない

から、少なくとも床面積と居住人員が単純な比例関係にあったという考えは再検討しなければならない。したがって小型住居は五人以下の居住人員であったという報告書の推算には異論がないけれども、四分の一の割合で存在している中型・大型住居について床面積に比例した居住人員を推算するにはなお疑問が残るのである。

住居内からは土器のほかに石製調理具である磨盤・磨棒や石製農具、骨製狩猟・漁撈具など各種の生産用具が出土している。男女の性別分業に関する民族誌の成果を援用すれば、ひとつの住居内に成年の男女が居住したことが推測され、加えて各住居は炊飯、消費の単位として独立していたという先の推論を認めるならば、小型住居には一般に五人以下の核家族が居住したという考えに導かれるであろう。中型・大型住居の居住人員とその実態については後章で検討することにした。

## 二 集落の基礎単位

住居が独立した消費単位であったとしても、各住居が直接に集落の構成単位になったのではなく、数棟の住居が有機的な紐帯をもって集落の基礎単位を構成していることは、早くから気付かれていた。日本の原始・古代社会について近藤義郎が「単位集団」と呼び、都出比呂志が「世帯共同体」の概念で把握したのは住居の存在形態を前提に社会論への展開をめざしたものであるが、しかしその集落の構成単位の理解にはなお解決すべき多くの問題が残されている。まず数棟の住居で構成される小集落が存在し、また大集落のなかにも溝などで区画されてまとまりをもった住居群が存在することは認められても、発掘で検出された住居が同時に何棟存在したかは必ずしも明確にされていない。複数以上の住居の同時存在を考古学的に証明することが困難であるために「数棟の住居」という曖昧な概数で表現されることが多いのが実状である。このことは住居群の単位把握を基にした社会論にも負の影響を及ぼし、単位の実態、集団関係を論理的に説明する方法がまだ呈示できないでいる。ところが仰韶文化遺跡の調査のなかにはこの問題解



決に良好な成果があらわれており、これを検討しながら考古学的方法を模索したいと思う。

### 1 基礎単位の把握

姜寨遺跡の南西一八キロメートルに位置する西安半坡遺跡<sup>9)</sup>では、同一層のなかで近接して存在し、かつ形態や構造が類似する二、三棟の住居群が同時に並存したものと判断できた。なかでも半坡期に属する六号・一〇号・一一号の三棟の円形平地式住居(図4)は、三メートルほどの間隔をおいて近接し、同じ構造をもつだけでなく、住居間の地面に一〇〜二〇センチメートルの厚さに粘土を貼り、そのまま粘土を住居の壁に連続させていることから、この三棟の

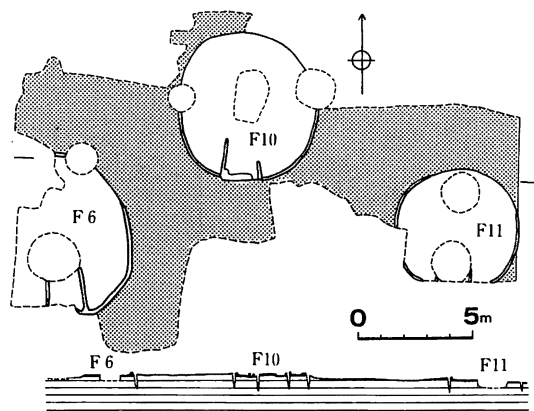


図4 半坡遺跡6号・10号・11号住居跡 (注9文献一部改変)

住居が同時に構築されたことはまず間違いない。住居の規模は西側の六号住居が三三平方メートルと比較的大きく、次いで一〇号住居が三〇平方メートル、最も小さい一一号住居でも二二平方メートルの広さがある。したがってこの例では三棟の中型住居で単位を構成したことになる。

また宝鷄北首嶺遺跡では、中央の広場を住居が取り囲む半坡期の集落が発掘されたが、その北に位置するⅠ区ではほとんどの住居が出入口を南に向けるなかで、二九号と三〇号の二棟の方形竪穴式住居は出入口を東南東に向け、ほかと異なる方向をとっている(図5)。この二棟のほか三〇号住居の西方七メートルに位置する二八号方形竪穴式住居も東向きの出入口をもつから、これをも含めるならば、三棟が同時並存していた可能性がある。この三棟はいずれも床面積二〇平方メートル以下の小型住居である。また南向き出入口の住居のなかでも、三一号住居と三二号住居とは三メートルの間隔をおいて並列し、さらに竪穴の周壁沿いに

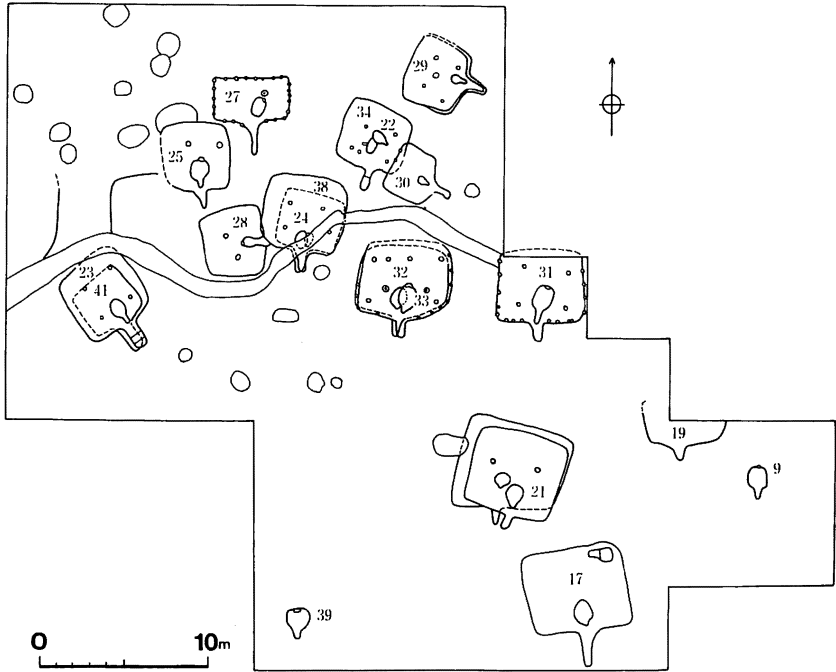


図5 北首嶺遺跡Ⅰ区の住居跡（注5文献 一部改変）

壁体を構築する木柱を立てる構造をとり、中型住居としてほとんど同じ規模をもつところから、相互に密接な関連をもつて並存していた可能性がある。また三二号住居の西北一〇メートルにある二七号住居は竪穴の周壁沿いに柱を立てる構造をもつて共通し、床面積が約半分の規模であることと間隔がやや離れすぎていることを問題にしなければ、この三棟が並存していたと推論できるだろう。同じようにこの集落の東南に位置するV区ではほとんどの住居が西北に出入口を向けるなかで、三メートル足らずの間隔で並列する二号と三号との方形竪穴式住居だけが出入口を東北に向けているため、この二棟も密接に結び付いて並存する住居と認められよう。

このように半坡遺跡や北首嶺遺跡など多数の住居で構成される集落のなかに、住居の構造、出入口の方向などが共通し、近接して同時に並存し、有機的な紐帯をもっていたと考えられる二、三棟の住居群が存在することが明らかにな

った。そしていずれの単位も三棟を越える数になることはなかったことに注意しておきたい。

また年代がやや下がるが、河南省鄭州の大河村遺跡<sup>10)</sup>で発掘された大河村三期（仰韶文化後期）の平地式住居は、二、三棟の方形住居が接続して長屋を形成したものであり、上にみた集落の基礎単位のあり方を如実に示したものである（図6・7）。その壁体は、地面に細い柱を密に立て並べ、横に蔓や細木を渡して骨組みとし、スサ混じりの粘土で塗り固めたものであり、一見、複数の部屋からなるひとつの住居のようにみえるが、実際はそれぞれが出入口や炊飯施設としての炉をもつところから、複数の独立した消費単位がひとつ屋根の下に有機的紐帯をもって生活していたことが窺えるのである。この事例においてはさらに出土土器の組成や住居の時間的系列変化を分析することによって、単位の実態、集団関係を知る手がかりがえられるのであり、節を改めてそれを詳しく検討することにした。

## 2 基礎単位の实態

大河村遺跡の一九・二〇号住居は、南側の一部が漢墓によって破壊されているものの、保存状態が良好で、内部から多数の遺物が原位置を保って出土した（図6）。東側の一九号住居は東に出入口、西北隅に炉台を設け、床面積は七・六平方メートル、西側の二〇号住居は南に出入口、中央やや東北よりに炉台を設け、床面積は一五・三平方メートルある。床面積でいえば二〇号住居は一九号住居の倍の大きさがあるが、先の姜寨遺跡の区分でみれば、いずれも小型住居に属す規模である。両住居に炉台があることから炊飯単位として各々が独立していたことが推測され、これをさらに裏付けるのが土器である。図で比較すれば明らかのように、両者には基本的に炊器の鼎、盛食器の鉢や盆、貯蔵器の罐や瓮が一通り揃い、大きな差異は認められない<sup>11)</sup>。もちろん鼎と罐の数量の上で二〇号住居が僅かに増さり、住居規模に倍の格差があるから、二〇号住居の人員がいくぶん多かったようであるが、大河村遺跡を特徴づける白衣彩陶の深鉢が両方に一器ずつ出土していることをみると、日常生活において両者に大きな格差があったとは考えられないのである。さらに紡錘車と狩猟用とみられる石投弾とが両方の住居から出土していることは、各々の住居でその方

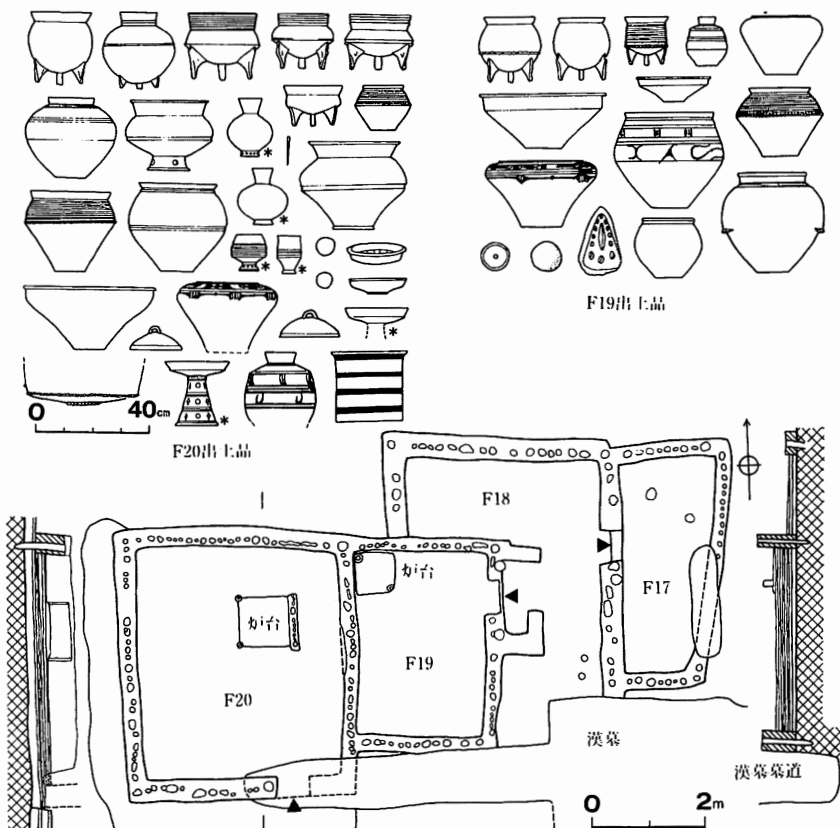


図6 鄭州大河村遺跡19・20号住居跡と出土品 (注10文献 一部改変)

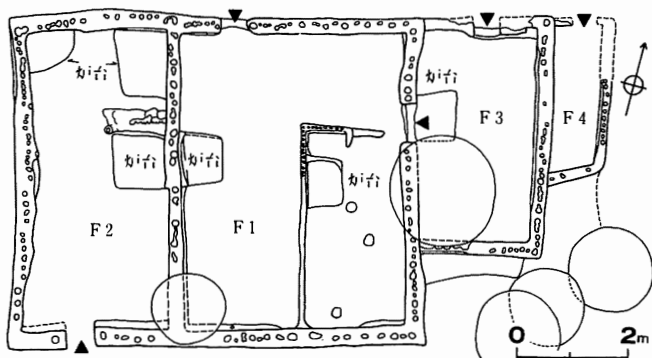


図7 鄭州大河村遺跡1・2・3・4号住居跡 (注10文献 一部改変)

面の生産活動がおこなわれたことを示している。

ただし小型壺、杯、豆(高杯)の三器種が二〇号住居にしかみられないことは重要である。図に\*印をつけた土器がそれであるが、いずれもこの時期に新たに登場した器種であり、各器種とも二器ずつセットになっていることが興味深い。同じ大河村遺跡の一号住居(図7)から彩陶の小型壺が二器連接した特異な形の土器が出土し、二という数に象徴的な意味を暗示させるからである。それはともかくとしても小型壺は酒瓶、杯は酒杯であり、豆は特殊な供膳用土器であるとすれば、壁一枚隔てたこの両者が時々二〇号住居に寄り集い、このような新しく登場した非日常的な土器を用いて共同で飲食し、親睦を深め連帯関係を確かめあったと想像することが許されよう。

さらにこの遺構において重要なことは、この一九・二〇号住居に先立ってほぼ同じ構造の一七・一八号住居が存在することである。一九・二〇号住居はその上に一部重なりながら位置をやや西にずらして構築しており、この位置関係、西大東小の形態の相似からみて、一七・一八号住居から一九・二〇号住居への改築が考えられる。この改築の際、東側の住居の床面積を一七号の五・五平方メートルから一九号の七・六平方メートルに広げるとともに、もともと一七号住居が出入口を一八号住居との間に設け、独立した住居というより一八号住居に付属する部屋に過ぎなかったのが、一九号住居では東側に新たに出入口を設けて一戸の住居として独立することになったのである。この住居構造の変化から、二部屋に分かれた住居に住んでいた親子関係をもち家族が、人員の増加、おそらく子供が成人して他から配偶者を迎え入れたことを契機として、居住面積を拡大し世帯を分かって独立した、と想定することができるだろう。したがって一九・二〇号住居に示される集団関係は、核家族の単なる複合というより、親子関係の拡大を通して結ばれた二つの近親世帯であり、二〇号住居の系列は直系といふべき家長世帯であるのに対して、一九号住居の系列はそこから分派した傍系の核家族の世帯であったと考えられる。この二世帯からなる家族体は、人類学者マードックのいう拡大家族 extended family の概念で捉えられるものであろう。<sup>12)</sup>

一方、大河村遺跡には三住居の集合体も存在する。図7は同じ大河村三期に属する住居で、中央のやや大きな方形住居が一号、西側の長方形住居が二号、そして東に三号、四号となっている。住居の建築工法は一九・二〇号住居とほぼ同じであるが、ここでは壁体の構築状況の検討によって増築の過程が明らかにされた。すなわち一号住居と二号住居がまず最初に同時に建てられている。一号住居は二〇・八平方メートルの広さがあり、東南部を逆L字形に薄い土壁で部屋に区画している。この区画された部屋は六・六平方メートルの広さがあり、炉台を有して消費単位として半ば独立していたらしく、この二室構成のあり方は先にみた一七・一八号住居と類似する。二号住居は一四・二平方メートルの広さをもつ。この一・二号住居に次いで七・八平方メートルの床面積をもつ三号住居が一号住居の東壁を利用して増築されるが、その際、一号住居の東壁に開いていた出入口を塞いで三号住居側の位置に炉台を設け、一号住居は代わりに北面に出入口を新たに作っている。その後、三号住居の東側に四号住居が増設されるが、これは二・二平方メートルという小規模なもので、炉も発見されていないことから、倉庫であったと考えられる。

この増築過程から、もと一・二号住居に分住した二世帯の大家族から新たに三号住居に核家族が独立して計三世帯になった経過が復原できる。先にみた一九・二〇号住居への改築状況から類推すれば、一号住居内で部屋を分かって半ば独立していた子供が、世帯を分けて三号住居に移り住んだという想定が可能であろう。そして分派した傍系核家族の住居は相対的に面積が狭く、中心となる直系家族の住居の二分の一以下であることは、一九・二〇号住居にも共通し、しかも増築された三号住居は先にみた一九号住居とほとんど同面積になっていることは、この遺跡において分派した傍系核家族に標準的な住居規模が定まっていたことを強く示唆している。

以上のように住居の時間的系列変化を追うこと<sup>(13)</sup>によって、また出土土器の組成を分析することによって、二、三棟から構成される住居群の形成過程とその居住者の集団関係を描き出すことができた。結局、仰韶文化において通常、二、三棟の住居が基礎単位になることは、床面積二〇平方メートル以下の小型住居が主体を占め、ひとつの住居に五

人以下の家族が居住するという状況において、親子関係の拡大を通して結ばれた大家族が軒を接して居住する際に必然的に導き出された結果であると考ええる。ただしその基礎単位となる住居群は、一般に想定されているような中型住居と小型住居との組合せに限らず、大河村遺跡のように絶対的には小型住居ながら相対的に大小規模の異なる住居で構成される場合や、数としては多くないだろうが、半坡遺跡や北首嶺遺跡にみたような中型規模の住居で構成される場合など、さまざまな組合せが存在したのである。いずれにせよ中型住居や大型住居を構成要素とする必然性はなく、小型住居だけで構成される場合もあったこと、また仰韶文化においては数棟に及ぶ数の住居が単位を構成するのではなく、二、三棟という小規模な数の単位であったことは注意しておくべきだろう。

### 三 姜寨遺跡の集落構成

姜寨遺跡では前章でみたような二、三棟で構成される集落の基礎単位は確認されていない。住居が比較的密集し、単位が顕在化しないという考えもあろうが、従来にない広面積の発掘がおこなわれた反面、住居間の細かい関係の追究がやや粗略になり、報告書から基礎単位を抽出することを不可能にさせているのが真相であろう。同じような集落構成をとる半坡遺跡や北首嶺遺跡において二、三棟からなる単位が確認されているので、姜寨遺跡にもおそらくこうした基礎単位が存在したと考えるのが自然であり、さらに詳しく検討する必要がある。ともあれここで注目したいのは、姜寨遺跡において環溝で囲まれた集落のなかに五群に分かれる住居群の存在が明らかにされたことである。順序が逆になるが、先に姜寨遺跡の集落全体を概観し、それからこの群別を検討していきたい。

姜寨遺跡の半坡期(姜寨一期)集落は、東西径二一〇メートル、南北径一六〇メートルの不整形な楕円形に環溝がまわり、その内側から全体で二二〇棟の住居と総計二六一基の炉跡が検出された(図8)。炉は基本的に一棟の住居につき一基であるから、本来はその炉の数以上の住居が存在したはずであり、また削平を受けた住居や炉、あるいは未発

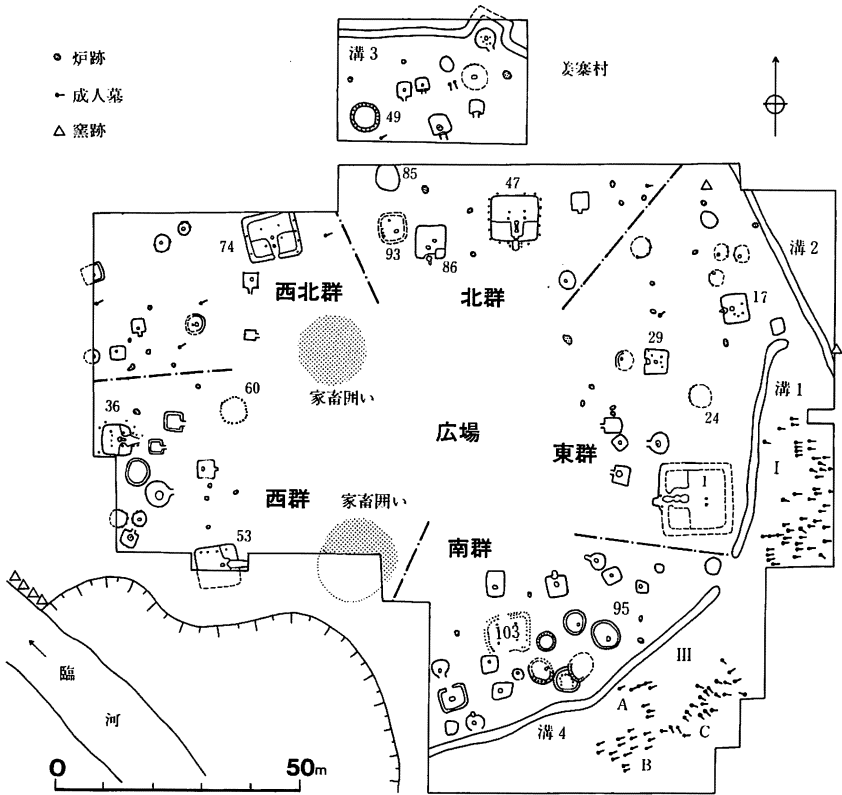


図8 姜寨遺跡1期の集落 (注1文献 一部改変)

掘区域の存在を考えると、最小三〇〇棟の住居は存在したであろう。しかし姜寨一期は少なくとも五〇〇年の幅があり、姜寨遺跡においても三小期に細分されているので、実際に同時に並存した住居の数はかなり少なかったと思われる。報告では住居の重複などを見込んで同時に一〇〇棟という数字を推算しているが、図9の相対層位による住居の数をみれば明らかのように、最も多数の住居が存在した中層においても総計五〇棟に満たないのであり、未発見の住居を見積っても、その中層の年代幅を考えれば、同時存在の住居は五〇棟、おそらくもっと少ない数字を考えておくのが無難である



東群 35棟

上			12	8	24	19	20												
中	130	119	140	116	97	109	7	139	13	21	33	10	17	22	144	131	131	145	146
下		124	141			14		15	23	29		11	27						28

南群 38棟

上				96	102	78	77	101											
中	129	127							82			92							
	111	112	100	99	98	103	104	88	108	95	142	81	80	79					
下						110	105	107	118			83	91	89	123	121	128		
															126	120			
															125				

西群 16棟

上			39	38	57														
中	53	41			40	58		36		64					138				
下						52		43	75	63	60								

西北群 11棟

上	66																		
中	73	70			137	74		69	68	72					71				
下				76		94													

北群 20棟

上								31						62					
中	34	42	47	86	85	49	56			46				26					
下				93		48	51	35	30	61	44			45	50				

図9 姜寨遺跡の住居の分布とその相対層位  
 (四角囲いは大型住居、太字は中型住居の番号、注1文献 一部改変)

う。人口は二〇〇人前後と推定する。

図8は同時に存在した住居の景観を示したものでないが、中央の広場を囲んで存在する住居が一定の群を形成し、群の間を若干の空隙をもって分割していることがわかる。そして各群のなかに一棟ずつ方形大型住居が存在し、その周囲に中・小型住居が存在するという形態をとっているようにみえる。この状況から群別が可能であり、報告ではこれを五群に区分したのである。未発掘区の線引きになお問題を残し、また東群と南群との線引きに町田章<sup>(14)</sup>と報告との間に異同があるが、環溝の不連続部分から集落内に通じる道を想定し、それを基準に分割する町田案を妥当と考える。報告では、各群はおよそ二〇棟前後の住居からなり、中型住居一棟と若干の小型住居が組んで母系家族を構成し、これが一棟の大型住居を中心に組んで氏族を構成したと推測する。しかし大型住居が常に各群に存在したわけではなく、東群では下層と上層だけ、そのほかの群はすべて中層に存在するだけである(図9)。したがって大・中・小型三つの規模の住居で構成される群のほかに、中・小型住居で構成される群など各種のパターンが存在したと考えるべきであろう。また前章で検討したように、中型住居だけ、あるいは小型住居だけで構成される基礎単位が存在する以上、中型住居と小型住居の組合せで基礎単位のすべてを律することはできない。そしてかりに先の推算のように集落全体で五〇棟の住居が存在し、住居数が均等に五群に分かれるとすれば、各群は一〇棟前後の住居で構成されることになり、計算の上では二、三棟の住居からなる基礎単位が三、四単位集合して群を形成していたと考えられる。

このようにして基礎単位と呼んだ二、三棟からなる住居群より上で、環溝に囲まれた集落より下に位置するレベルの住居群の存在が明らかになった<sup>(15)</sup>。かりに集落を上位レベル、この住居群を中位レベル、基礎単位を下位レベルと呼ぶと、結局、仰韶文化の集落は住居一棟のレベルまで含めれば、概念的に四つのレベルに区別できるのである<sup>(16)</sup>。

#### 四 仰韶文化の集落構造とその背景

##### 1 大型住居の性格

姜寨遺跡の住居面積の分析から六〇平方メートル以上を大型住居と規定した。大型住居は炊飯施設となりうる炉や睡眠できるベッド状土台をもつところから、小型住居の拡大形態として同様に住居としての機能がまず推測できる。これを大型住居と呼ぶ所以である。しかし姜寨遺跡において明らかのように、中位レベルの住居群の各々にせいぜい一棟が存在するにすぎないことから、中位レベル以上の住居群の中心的な役割、そのレベルでの公共的な役割を推測することもできよう。同時期の半坡遺跡や北首領遺跡においても大型住居は小型・中型住居と群を形成し、共通した性格をもっていたことが知られるが、その公共的な役割についても少し検討しておきたい。

仰韶文化以前の住居は、発掘例がまだ多くないが、径二、三メートル程度の小規模な竪穴式住居がほとんどである。現在の資料による限りでは、大型住居の出現は仰韶文化をもって始まるということができ、それには大型建築を可能にする技術の進歩が前提になることはいうまでもない。巖文明は仰韶文化のなかでも次第に大型化する傾向があることを指摘している<sup>17</sup>。しかしここでは大型住居が広場の回りに住居が取り囲む形態の集落の形成とほぼ同時に出現し、機能的に両者が密接に関わっていることに注意しておきたい。日本の縄文文化において大型建物が広場をもつ「縄文モデル村」にのみ建設されることから、公共的広場にも関わる共同行事の一貫としての施設であり、儀礼や宴会をはじめ単なる寄り合いや談合の公民館的な場と推測する小林達雄の見解は示唆的である<sup>18</sup>。また楕円形の環溝に囲まれ、中心に広場をもつ半坡期の集落が発掘された甘肅省秦安大地湾遺跡<sup>19</sup>では、その広場の中央に建築規格の最も高い床面積六〇平方メートル余りの大型建物が位置しているという。大地湾遺跡におけるこの配置は、広場と密接に関連した公共的場としての大型建物の性格を雄弁に物語っているといえよう。今後、この建物には構造や出土品などに住居と

しての性格があつたのか、姜寨遺跡などの大型住居との共通点があるのか、という検討が必要であらう。

## 2 環溝集落の特徴

仰韶文化に到ると、以前に比べてはるかに大きな集落が形成されると同時に、陝西地区の半坡期ではそれを溝で囲んだ環溝集落が出現する。姜寨遺跡の環溝は数段に分かれ、溝底に腐食土が堆積していることから、空溝であつたと考えられる(図8)。遺跡の東部で居住区と墓地とを区画する溝1は、深さ二・二―四メートル、幅一・八―三・二メートルの逆台形を呈する。北東部を区画するのが溝2、南東部を区画するのが溝4で、それぞれ溝1との間に六、七メートルの集落の出入口となる空隙があり、そのやや内側に竪穴式住居を配置している。また北部を区画する溝3には突出部があり、ここにも竪穴式住居を配置している。これらの住居が溝の内側で一定の間隔をおいて設置され、とりわけ溝3が不自然な突出部をもつところから、報告ではその住居を見張り小屋とし、戦時の防衛目的の強い環溝と推測している。しかしいくつかの問題が残されている。まず北部の突出部内の住居は〇・七メートル以上の深さの竪穴式住居であり、見張り小屋としては不向きな構造になっている。また溝1は数基の貯蔵穴を破壊しており、居住区がある程度の規模を有した後に溝の掘削が始まつたと考えられる。それに溝のぎりぎりのところまで住居や貯蔵穴が作られ、溝の内外に柵や土塁のあつた形跡がなく、戦争の激化を窺わせる武器類の発達に関する証拠が乏しいことも問題である。半坡遺跡の環溝のように、深さ五―六メートル、幅六―八メートルと大きく、溝の中程から傾斜角が急に強くなって戦時の防衛目的を想像させるものもあるけれども、むしろ害獣の侵入を防ぐとともに、内なる世界と外なる世界とを区画する象徴的な意味が強かつたと考える。とくにそれは集落全体の集団規制の強かつた仰韶文化前期<sup>20</sup>において、非常に重要な意味をもつたと考えるのである。

この仰韶文化の集団規制を窺うに十分な集落の特徴は、広場を中央におき、住居が出入口をすべて広場に向けた求心的な配置をとることである。姜寨遺跡の広場は、周囲がやや高く中央に向かって低くなる鍋底形を呈し、面積は四

千平方メートルほどで、西側の二ヶ所に家畜の糞便が堆積した家畜囲いがあることを除けば、遺構といえるものは検出されていない。そしてすべての住居が出入口を中心に向け、広場を取り囲むように住居が配置されている。統一的な集団が存在し、かつ各成員の集団意識が強烈な状況のもとでのみ「背風向陽」の原則を破ったこのような住居配置が発生することを指摘した嚴文明の見解を支持したい<sup>21</sup>。ほかに甘肅大地湾遺跡でも環溝内の住居が出入口を中心の広場に向けた求心的配置をとることが確かめられ、北首嶺遺跡では、大・中・小型住居で構成される住居群が、南北一二〇メートル、東西八〇メートルに踏み固められた広場の周囲から北、西、南の三群に分かれて発掘されている。このように全体像の知りうる半坡期の集落はいずれも広場を中心とした住居配置となることで共通する。これは公共的性格をもった大型住居を構成要素とすることと連関する重要な特徴といえることができ、集団の内なる共同社会の連帯の維持という必要性が強烈に反映し、階層分化が顕在化しない平等社会を特徴づける集落構造と評価したい。

集住と求心的配置という共通した特徴をもつ半坡期の集落は、集落規模の点でも極めて規格的である。環溝はいずれも地形的な制約のために不整形の楕円形となるが、姜寨遺跡は推定長径二一〇メートル、短径一六〇メートルあり、大地湾遺跡は長径二一〇メートル、短径一四〇メートルとこれに近似する。また半坡遺跡はボーリングや地形などから長径二〇〇メートル、短径一二〇メートル以上と復原され、北首嶺遺跡は環溝こそ発見されていないが、北群の住居と南群の住居との両端距離は二〇〇メートルを測るから、集落の規模としては類似した大きさであったらしい。集落内の住居数が確定できないけれども、単純に集落範囲だけの比較からみれば、半坡期に属する以上の四集落に居住した集団人口は大差なかったものと考えられる。このことから同様の環境や生産状況、あるいはその結果としての一定の人口支持力のもとで、同等の集団規模とならざるをえなかった制約を読み取ることができよう。

## おわりに

仰韶文化の集落構造を分析するにあたって、まず住居を床面積から大型、中型、小型に区分し、小型住居でも炊飯用の炉があり、炊器・盛食器・貯蔵器が一通り揃っていることから、各住居が炊飯・消費単位として独立し、そこに五人以下の核家族が居住したことを明らかにした。また同時に二、三棟の住居が有機的な紐帯をもって集落の基礎単位を構成することを示し、土器組成や住居の時間的系列変化を捉えることによって親子関係の拡大を通して結ばれた大家族が居住したことを推測した。さらに姜寨遺跡の例から、この基礎単位が三、四単位集合する住居群が認められ、これ以上のレベルに公共的性格を併せもつ大型住居が存在すること、またこの住居群が五群並存してひとつの集落を形成することを明らかにし、住居から集落まで構造的に四つのレベルを区別したのである。最後に、半坡期の集落は一般的に、広場を中央におき、住居が出入口を広場に向けてその回りを取り囲む規則的な配置をとり、集落規模の点でも規格的であることを指摘し、そこに共同体としての紐帯が強まったことを読み取ったのである。

仰韶文化の前後の時代、あるいは同時代の他の文化に属する集落の様相は、仰韶文化ほど明確ではないけれども、ここで集落構造の変遷について一応の見通しをたてておこう。仰韶文化以前の集落は小型の竪穴式住居が数棟散在する形態であり、仰韶文化にいたって集住化と規格化が強まったようである。しかし仰韶文化後期からこの集落は解体を始め、竜山文化には全く異なった集落構造をとるようになる。すなわち大型建物が大型化の度を増して住居としての性格あるいは階層差のない社会での公共的性格を失い、仰韶文化末期の甘肅大地湾遺跡九〇一号建物(2)のような独立した中心的建築が形成され、やがて階級社会のモニュメントとしての宮殿に発達していく反面、河南竜山文化の安陽后岡遺跡(3)のような小型住居を主体とする等質的な住居で構成される一般村落が出現し、そこではもはや大型住居や広場は存在しないのである。

一方、仰韶文化に並行する時期の東北方最古の新石器文化に属する内蒙古敖漢旗興隆窪遺跡<sup>(2)</sup>では、地表観察によつて長径一八三メートル、短径一六六メートルの楕円形環溝とその内側に一〇〇棟前後の竪穴式住居が確認されている。この興隆窪文化については採集経済の段階と考える説があるが、環溝集落の規模は半坡期のそれに近似し、同等の人口支持力を認めるならば、一定の農耕生産力をすでに有していたと考えることも可能である。また興隆窪文化に後続し、仰韶文化後期に並行する紅山文化の敖漢旗西台遺跡<sup>(3)</sup>は、不規則な長方形に環溝をめぐらした二つの集落が隣接し、東南部の集落の環溝は周長六〇メートルになるといふ。平面形が楕円形ではなく長方形であり、二つの環溝集落からなることは、その後の夏家店下層文化や竜山文化、あるいはそれ以後の城塞を想起させ、階層差のある社会の出現を暗示する。今後、仰韶文化の集落との総合的な比較研究が期待できる。

ほかにも論じるべき問題が多く残されている。集団構造の議論、とりわけ仰韶文化Ⅱ母系社会説<sup>(4)</sup>を再検討するにあつては墓地の分析は不可避であろう。また貯蔵穴や家畜囲い、土器窯など生産に関係する遺構の分析は、集落論には必須である。けれども本稿では集落の居住景觀の現象的な構造分析にとどめ、稿を改め検討したい。

## 注

- (1) 半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館『姜寨—新石器時代遺址発掘報告』(文物出版社、一九八八年)。以下、姜寨遺跡に関する記述は、特に断わらない限り、この報告書に基づいている。
- (2) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店、一九八九年)は弥生時代以降の集落について多角的な分析をおこなっている。土器の器種構成から住居内での生活状況を復原する方法、住居群の認識方法などは本稿でも参考にした。
- (3) 嚴文明『仰韶文化研究』(文物出版社、一九八九年)は、仰韶文化の編年を再検討し、また集落や墓地の分析から社会構造に論及しており、中国における仰韶文化研究の最前線を示すものである。
- (4) 小野和子『原始母権社会説の検討—仰韶文化の墓葬と住居址をめぐって—』(『古史春秋』第一号、一九八四年)。

- (5) 中国社会科学院考古研究所編『玉鷄北首嶺』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第二六号、文物出版社、一九八三年）。
- (6) 姜寨一期の墓地を含めた姜寨遺跡全体での土器構成は、炊器の夾砂鼓腹罐が一九パーセント、盛食器は鉢が四五パーセント、盆が四パーセント、貯蔵器は泥質罐と瓮を合わせて二四パーセントという比率であり、ひとつの住居内から出土する土器の器種構成と近似した割合になっている。このことは住居内の土器が本来の構成を保っていることを示している。
- (7) 近藤義郎「共同体と単位集団」（『考古学研究』第六卷第一号、一九五九年）。
- (8) 都出比呂志前掲注2。
- (9) 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館編『西安半坡—原始氏族公社聚落遺址—』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第一四号、文物出版社、一九六三年）。
- (10) 鄭州市博物館「鄭州大河村仰韶文化的房基遺址」（『考古』一九七三年第六期）、同「鄭州大河村遺址発掘報告」（『考古学報』一九七九年第三期）。
- (11) 嚴文明注3二—三頁は、一九号住居から鼎六、罐六、盆二、彩鉢二、素鉢一、壺一、瓮一、二〇号住居からは鼎七、罐九、壺四、杯二、蓋三、碗一、彩鉢一、盆一、豆一、甑一、瓮一、円底器一が出土しているという。器種認定や数え方に注10の報告と若干の異同があるが、ここでは報告にしたがう。
- (12) G・P・マードック『社会構造』（内藤義爾監訳、新泉社、一九八六年）。
- (13) 大河村遺跡の例は長屋式の住居であったために居住者の集団関係がつかみやすかつたのは事実であるが、そうでなくとも層位的に住居の時系列変化を追うことによって分析できる場合がある。仰韶文化より後の竜山文化の例であるが、河南省安陽后岡遺跡では、数棟の住居が全く同じ位置に五、六回重複して建てられ続け、一方で時々空閑地に相対的に規模の小さい住居が現れるものの永続しない、ということが確かめられている（中国社会科学院考古研究所安陽工作队「一九七九年安陽后岡遺址発掘報告」、『考古学報』一九八五年第一期）。ここから直系家族による居住地の安定的継承と傍系家族の不安定な析出過程を読み取ることができるといえる。
- (14) 町田章「中国新石器時代の集落—姜寨遺跡の場合—」（『季刊考古学』第七号、一九八四年）。
- (15) 河南省西南部に所在する浙川下王岡遺跡では二九もの住居が一行に連接した仰韶文化後期の長屋式住居が発見された（河南省文物研究所・長江流域規劃弁公室考古隊河南分隊『浙川下王岡』、文物出版社、一九八九年）。すべて同時の建



築か、あるいは増築の結果であるのかは明かでないが、この全体が集落の基礎単位となって拡大家族が居住したのではなく、もうひとつ上の中位レベルの集団が居住したと考える。

- (16) 姜寨遺跡の報告や巖文明は、集落の東側で三区に分かれて見つかった墓地が中位レベルの住居群に対応するものと考えている。住居群が五群あるのに対して墓地は三区と少ないことについては、集落北側の未発掘区に二区の墓地が存在したと仮定するのであるが、苦しい説明というほかない。Ⅲ区の墓地は(A)幼児を入れた土器棺と装身具を多数もつ青年土壙墓からなる群、(B)幼児を入れた土器棺と成人土壙墓からなる群、(C)頭位がでたらめで副葬品をほとんどたず、土器棺を混えない群という三つの群に分けられ、一方、Ⅰ区の墓地は土器棺を混えない成人土壙墓だけで構成されるというように、各墓区が住居群ほどには等質的ではない。おそらく各墓区は中位レベルの住居群とは違う集団原理で区分されていたのであろう。しかし同じ半坡期の華陰横陣墓地では、細長く大きい長方形土壙のなかに五、七基の正方形の小土壙があり、その小土壙に二、三以下の人骨が二次的に集骨合葬されていたが、その墓地構成からみて、小土壙が基礎単位と呼んだ下位レベルの住居群に、大土壙が中位レベルの住居群に対応するのではないだろうか(巖文明前掲注3二四八―二六一頁)。

- (17) 巖文明前掲注3二二三・四頁。

- (18) 小林達雄「原始集落」(岩波講座日本考古学4 集落と祭祀)、岩波書店、一九八六年)。

- (19) 張学正・郎樹徳「甘肅大地湾聚落形態的初步研究」(一九九〇年環渤海考古学術討論会発表資料)。また張・郎両先生からご教示いただいた。

- (20) 半坡期における集団規制の強化は墓において多数の人骨を二次的に集め合葬する現象としてあらわれている。この埋葬方法は個人や家族よりも集団の連帯の維持が優先されることを強く物語っている。

- (21) 巖文明前掲注3二二七頁。

- (22) 甘肅省文物工作队「甘肅秦安大地湾九〇一房址発掘簡報」(『文物』一九八六年第二期)、張学正・郎樹徳前掲注19。

- (23) 中国社会科学院考古研究所安陽工作队前掲注13。

- (24) 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「内蒙古敖漢旗興隆窪遺址発掘簡報」(『考古』一九八五年第一〇期)。

- (25) 秋山進午「紅山文化と先紅山文化―赤峰紅山考古、其の一」(『古史春秋』第五号、一九八九年)。

- (26) 楊虎「敖漢旗西台新石器時代及青銅時代遺址」(『中国考古学年鑑一九八八、一九八九年』)。

- (27) 母系社会といっても地位や財の継承と婚後居住規定とを区別する必要があるが、姜寨一期のⅠ区墓地をみる限りでは、

夫方居住、妻方居住の両方が混在した双系出自の可能性が高いと考える。すなわち注にC群とした墓群は、通常の西向き  
の埋葬頭位に従わないだけでなく、副葬品をほとんどたず、またA群やB群と違って幼児を埋葬した土器棺を伴な  
わない男性・女性の双方を含む成人のみの埋葬であることから、よその集落から嫁いできた婚入者たちの墓群であつた  
と推測するからである。